

## LUI「公募研究」成果報告書

研究課題（和文）：徳川政権の外交—あるいは「外交」以前—

研究課題（英文）：Tokugawa Diplomacy: Diplomacy Before Diplomacy

申請者名・所属先：松方冬子・史料編纂所

海外招聘者名：Tremml-Werner Birgit (University of Zurich)

### 1. 研究の目的

本研究では、徳川政権の外交を、①親姻戚関係、②「国書」、③パス（朱印状、信牌など）、④条約（約条・契約）、⑤関税（礼物）、⑥領事（居留民の長）に注目しながら、抜本的に見直すことを目的とする。これらの指標は、世界的に前近代外交・対外関係（貿易や人の移動に対する権力のコントロール）を分析する際の指標となると考えており、本研究を通じてヨーロッパ・アジア各地の事例と多角的に比較しつつ磨き上げていく。つまり、本研究は外交の世界史のパイロットケースとして近世日本を扱う。

なお、本研究は、科学研究費補助金基盤研究（B）「朱印船のアジア史的研究」（2015～2018年度）の成果を発展させ、次の研究につなげるための重要な土台になるものである。

### 2. 研究開始当初の背景

近世日本は「鎖国」のイメージが強いが、「国書」による対等な外交（朝鮮）、支配—従属（琉球）、「国書」を伴わない貿易（清、オランダ）、国家を形成しない民（アイヌ）の土地への植民と、多様な対外関係を形成し、十分に世界史の縮図としての側面を持っている。とくに前近代の稀有な史料群である、オランダ語、日本語、漢文史料が使える点でも重要なサンプルケースである。従来、異文化間の外交史を語る際には、英語と漢文の史料を組み合わせる研究が主流だったが、その2つを見ただけでは抜け落ちた点をオランダ語と日本語の史料で拾うことが可能である。

上記の研究史的背景から立ち現れてくるのは、ほとんど内政と言っても良い、③パス、④

のうち約条・契約、⑤関税、⑥居留民の長への統制、といった事柄が、19世紀の半ば以降「外交」と呼ばれる範疇の代替をなしていた（逆に言えば、そういうものを「外交」が代替した）という事実である。近代歴史学は、前近代を分析するための十分な語彙を持っていないので、当面ここでは「外交」以前の「外交」としておく。外交史研究は、近代歴史学の先鞭をつけた分野であり、本研究による外交史の見直しと日本史グローバル化は、近代歴史学そのものを見直すことでもある。

### 3. 研究の方法

本研究を国際的研究として確立させるために、チューリッヒ大学研究員の Birgit Tremml-Werner 氏を招聘した。招聘研究者は、日本語・漢文・スペイン語の史料を用いて、徳川政権の外交を研究しており、すでに、2015年7月（台北）、2016年12月（東京）、2017年8月（リスボン）のワークショップ・国際会議にて申請者と協力関係を構築してきた。上記2018年12月 Venice ワークショップの主催者の一人でもある。

本研究においては、おもにドイツ語圏における外交史研究を、19世紀以来の研究史と現在の状況、日本への影響について整理するほか、申請者との緊密な討議により、先に挙げた①～⑥の指標を練り上げ、上記3つのワークショップの内容に反映させた。また、研究成果の英語版についても助言を行なうという意味も含めて、海外招聘者との2回のオープンセミナーを開催した。

さらに、上記の研究をさらに発展させ深めるために、2回のオープンセミナー特別回を開催した。

第19回「王の手紙、皇帝の文書：—外交の世界史に向けた韓国、タイ、日本の鼎話の試み」は、漢文史料をおもに用いて中朝関係史を研究している韓国の研究者2人と、ヨーロッパ言語史料を用いてアユタヤ朝シャムの対外関係史を研究しているタイの研究者2人を招聘し、日本人研究者（漢文派と欧文派の両方がいる）を交えた3者の間でどの程度、議論を共有できるかを探る試みである。結論からいえば、

議論は完全にかみ合っており、とくに「話が通じない」と思う場面はなかった。通訳を用意したが、実際には英語だけの討論が可能で、わざわざ台湾から来てくださったフロアの研究者もあり、非常に有意義であった。

第20回「社会科学と人文学の対話—『国書がむすぶ外交』「総論」を素材に—」は、おもに社会学的な立場から歴史を扱った『教養としての世界史の学び方』（山下範久編）と、実証史学の成果である『国書がむすぶ外交』（松方冬子編）の、編者・執筆者が集まって互いの成果を批判・批評しあう場として企画した。出発点や問題関心を共有しつつ、それに立ち向かう方法論が異なる者たちの対話として、成果があったと考える。

#### 4. 研究成果

##### 第3回 HMC オープンセミナー

- 題目：『外交』とはなにか—言葉を考える—
- 日時：2018年10月26日（金）17:00 - 19:00
- 場所：東京大学東洋文化研究所 第一会議室
- 報告者：松方冬子（史料編纂所）
- ディスカッション：葛西康徳（人文社会系研究科）
- 概要：日本史・東洋史・西洋史の専門家がともに議論する上で大きな障害になるのが、言葉の違いである。「外交」は *diplomacy* の訳語か、それとも『礼記』の言葉か。「帝国」は *keizerrijk*（皇帝の領地）か、*empire*（命令の行き届く範囲）か。現在の日本の学術用語は、欧文脈（ゲルマン・ラテン）、漢文脈の交わるところに存在し、ときに互いに矛盾する複数の意味を持つことも多い。しかも、ふだん我々はあまりそれを意識していない。「外交の世界史」を記述するために重要な言葉をいくつか取り上げて考察した。

##### 第13回 HMC オープンセミナー

- 題目：Murakami Naojirō and Iwao Seiichi: Revisiting the role of modern

historiography and European sources in Japanese history（村上直次郎と岩生成一—近代歴史学と欧文史料による日本史—）

- 日時：2019年7月12日（金）17:00 - 19:00
- 場所：東京大学 伊藤国際学術研究センター3階 中教室
- 報告者：Birgit Tremml-Werner（史料編纂所）
- コーディネーター&ディスカッション：松方冬子（史料編纂所）
- 概要：日本の歴史学は、1880年代以降、西洋の歴史学・歴史叙述の影響のもとに発展してきたというのが一般的な理解である。しかしながら、歴史叙述における反対方向の作用は、ほとんど省みられてこなかった。学問は、同時代の社会的な状況と潜在的な関係を持つものであるが、日本近世対外関係史（外交史）研究と1890年代以降の日本の南進は、その例となる。本報告では、ヨーロッパ言語史料を用いることが、日本人歴史家、村上直次郎（1868～1966年）と岩生成一（1900～1988年）の幅広い学識に与えた影響と、彼らの学識がヨーロッパ言語史料の読解に与えた影響を、個別実証的ならびに方法論的な見地から論じた。個別実証的には、村上と岩生が、ヨーロッパ海外発展史から借用した重要な修辭、たとえば商業資本主義、個人の主体性、主権などについて検討した。さらに、レオポルド・フォン・ランケ流の16～17世紀対外関係の枠組みが、近世国家によって、あるいは近世国家のために作成された史料の、村上による位置づけ、解釈、組み立てにどのような特徴を与えたかについても、再検討を加えた。それによって、歴史学が、大陸と時代を超えて、双方向的に作り上げられてきたのか、そしてどの程度、この動きが徳川日本を西ヨーロッパの同時代的発展を描こうとする戦略として行われたのかを議論した。

##### 第19回 HMC オープンセミナー（特別回）

- 題目：「王の手紙、皇帝の文書：—外交の

世界史に向けた韓国、タイ、日本の鼎話の試み」

- 日時：2019年11月29日（金）13:00 - 19:00
- 場所：東京大学 伊藤国際学術研究センター 3階 中会議室
- 報告者：パーワン・ルアンシン（チュラーロンコーン大学）、ティーラワット・ナ・ポンペット（チュラーロンコーン大学）、鄭東勲（ソウル教育大学）、丘凡眞（ソウル大学）
- 司会：松方冬子（東京大学史料編纂所）
- 言語：英語・韓国語・日本語
- 共催：東京大学ヒューマニティーズセンター、東京大学史料編纂所
- 概要：前近代の外交の世界史を語るうえで、欠かせないのが国書である。しかし、国書が19世紀ヨーロッパ型の外交史の外にあるがゆえに、その多様な具体像は必ずしも十分明らかにされていない。本セミナーでは、タイと韓国から研究者を招き、報告を仰ぐとともに、共通の議論の土台を作ることを目指した。パーワン・ルアンシン氏（Bhawan Ruangsilp）は、アユタヤ王統記及びオランダ東インド会社文書に記録された国書の分析を通じて、近世のタイとビルマが如何に対話の道を拓き均衡を維持しようとしたかを探った。ティーラワット・ナ・ポンペット氏（Bhawan Ruangsilp）は、オランダ東インド会社がスア王の治世初頭に対シヤム条約の更新と平和同盟の延長を企図した際、外務・財務大臣（プラ克蘭）が、外交上のプロトコルや先例、王の命令などについて会社総督に送った手紙を分析した。鄭東勲氏（JUNG Donghun）は、明の皇帝から宦官を通じて朝鮮に伝えられた非公式のメッセージに、公式の文書には出てこない皇帝の個人的な興味が反映されていたことを明らかにした。丘凡眞氏（KOO Bumjin）は、1644年の清の入関以前における朝鮮国王の冊封文書が合壁であったか否かを問い、同時代の記録から実像に迫った。

#### 第20回 HMC オープンセミナー（特別回）

- 題目：「社会科学と人文学の対話—『国書がむすぶ外交』「総論」を素材に一—」
- 日時：2019年12月20日（金）18:00～21:00
- 場所：東京大学伊藤国際学術研究センター3階
- 報告者：松方冬子（東京大学）、岡本隆司（京都府立大学）、山下範久（立命館大学）、廣野美和（立命館大学）
- コーディネーター：松方冬子（東京大学）
- 共催：東京大学ヒューマニティーズセンター、東京大学史料編纂所
- 概要：今年、『教養としての世界史の学び方』（山下範久編、東洋経済新報社）、『国書がむすぶ外交』（松方冬子編、東京大学出版会）という2冊の書が上梓された。前者は社会科学中心の教科書、後者は人文学の論文集という違いがあるが、どちらも西洋中心主義から世界史を解放するべく、時系列史に疑問を呈しつつ、空間把握・「19世紀言語」という切り口で世界史を考え直そうとしている点に共通点があると考えた。本セミナーでは、『教養としての世界史の学び方』の編者山下範久氏と、同書で西洋中心の世界史を批判された岡本隆司氏、さらに同書で「戦争と外交」という言葉について分析を加えられた廣野美和氏をお迎えし、2冊の本を相互に批評しあい、応答した。それによって、社会科学と歴史学の問題意識や方法論の違いと協働の可能性について議論した。「大きな枠組みだが不正確／精緻だが全体像が見えない」というありがちな比較ではなく、それぞれの学問が何を根拠に何を指すのかというところに踏み込むような議論を目指し、一定の成果が得られた。なお、第20回セミナー（特別回）については、下記のサイトに掲載したコーディネーターとしての総括も参照されたい。  
<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/fuyuko/kaken/humanities.html>

#### シンポジウムの開催

- 題目：『長崎口』の形成—15～19世紀の

長崎から見た日本列島の国民国家形成と  
対外関係一

- 日時：2019年6月29日（土） 10：30～17：30
- 場所：長崎歴史文化博物館 1階ホール
- 報告者：松方冬子、橋本雄、織田毅、村尾進、吉村雅美、海原亮
- 司会：平岡隆二（京都大学人文科学研究所）
- 主催：公益財団法人 鹿島学術振興財団助成事業「長崎口の形成」
- 協力：長崎市長崎学研究所

● 概要：本シンポジウムは、一般向きであることを考え、「長崎から世界はどう見えるか？」というテーマを設定した。当日は、以下のような趣旨説明を行った。「いま、世界中の人が、今までの歴史には飽き足らず、新しい歴史が書けないか模索している。グローバル・ヒストリーと呼ぶ人もいる。今までの世界史は国別の歴史の集まりだったが、国別の歴史だと、例えば、長崎があって、東京があって、その向こうに世界があるように思える。」「しかし、グローバル・ヒストリーがうまく書ければ、長崎の歴史は、世界とそのまま繋がれるはずである。長崎だけでなく、世界のどこを中心にしても書けるはずである。今まで書かれているグローバル・ヒストリーは、必ずしも成功していない。地域とつながっていない世界史は誰にも興味を持ってもらえない。長崎から見るとかと言っても、それは長崎中心とか長崎万歳とは違う。むしろ、「世界のどこにでもある普通の町」として長崎を見ていく。」「世界が自分とつながってくれるのを待つのではなくて、自分が世界とつながっていく、そのために何が必要か、を考えていきたい。」本シンポジウムでは新しい知見が紹介されただけでなく、大ホールを埋め尽くす聴衆を得、総合討論ではフロアからも盛んな発言があつて、建設的な議論が行われた。

本シンポジウムについては、下記のサイトも参照されたい。<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/fuyuko/kaken/nagasakikuchi.html>

国際ワークショップの開催

- 題目“Correspondence between Crowns: Asian Diplomatic Practice in the 17<sup>th</sup>-19<sup>th</sup> Centuries”
- 日時：2019年2月20日（水）
- 場所：タイ国バンコク市チュラロンコン大学 Room 708, 7<sup>th</sup> floor, Borommaratchakumari Bldg., Faculty of Arts
- 報告者：Fuyuko Matsukata (The University of Tokyo), Bhawan Ruangsilp (Chulalongkorn University), Kanako Kimura (Nagoya University), Dhiravat na Pombejra (formerly Chulalongkorn University), Akiko Harada (Keio University), Takashi Hasuda (Ritsumeikan Asia Pacific University), Peter Borschberg (National University of Singapore), Hiroshi Kawaguchi (Aichi University)
- 主催：The History Department, Faculty of Arts, Chulalongkorn University
- 協力：Chulalongkorn University, the Japan Foundation Bangkok, the Prince Dhani Nivat Foundation, and JSPS KAKENHI Grant Number 15H03236
- 概要：The organizers, through the shared experiences of reading Dutch sources, have known each other for more than ten years. This time we chose a broader theme for the workshop than the Dutch East India Company. Our project has just published a book in Japanese, The English title being *Correspondence between Crowns*.

Diplomatic practices in early modern East and Southeast Asia have been commonly understood through the “tribute system,” a concept that originally referred to the foreign relations of the ancient Roman Empire and later was applied to explain the same in the Sinocentric world order. All too often the concept is used to refer to any diplomatic tradition outside the



confines of modern Europe. We should question whether the “tribute system” sufficiently explains Asian ideas and practices. Furthermore, although global historians have increasingly criticized and challenged Eurocentric world histories, we must ask if we have in fact developed an effective framework to discuss the history of diplomacy from a global perspective. The organizers of this workshop suggest that we evade nineteenth-century European terminology and look for solutions to these questions from within Asian history.

The workshop focuses on the correspondence between the rulers of these states. The Thai word *prarachasan* (king’s letters) and the Japanese term *kokusho* (state letter) possess a similar sense and historical backgrounds. We do not intend to restrict terminology: both *prarachasan* and *kokusho* could denote a “state letter,” “sovereign’s letter,” “royal letter,” or “king’s letter” in English.

For rulers in early modern East and Southeast Asia, the exchange of missives and embassies was instrumental to conducting diplomacy. Letters were particularly important since they were considered true representations of the ruler’s own words, whereas envoys served principally as messengers. Formal relations were maintained through frequent correspondence among monarchs and rulers. The organizers propose a multilateral comparative and connective approach to study not only early modern intra-Asian diplomacy but also Euro-Asian correspondence by closely reviewing the cases of Siam and neighboring states.

Siam faced not only the China Seas

but also the Indian Ocean, meaning that we need to survey multiple sources from Chinese, European, Japanese and Malay sources. In other words, we can reconstruct Siam’s foreign relations even though there are few extant sources from the Siamese capital of Ayutthaya in the Thai language. The Japanese presenters tried to contribute to this project of reconstruction. Through such examination and collaboration, we aimed to locate Siamese subjectivity in its practice of foreign relations.

タイを代表する研究者との交流ができ、有意義な議論が行われた。本ワークショップについては、下記のサイトも参照されたい。

[http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/fuyuko/kaken/shuinsen\\_2018.html](http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/fuyuko/kaken/shuinsen_2018.html)

## 5. 主な発表論文等

[図書]

- 松方冬子編『国書がむすぶ外交』東京大学出版会、2019年1月

[論文]

- MATSUKATA Fuyuko, “Contacting Japan: East India Company Letters to the Shogun,” *The Dutch and English East India Companies: Diplomacy, Trade and Violence in Early Modern Asia*, (ed. Adam Clulow and Tristan Mostert), Amsterdam University Press, December 2018
- 松方冬子「総論 国書がむすぶ外交—15～19世紀南・東シナ海域の現場から和文脈の世界史をさぐる—」松方冬子編『国書がむすぶ外交』東京大学出版会、2019年1月
- 松方冬子「オランダ共和国における宗教的寛容と日本」浅見雅一編『キリスト教と寛容—中近世の日本とヨーロッパ』慶応義

塾大学出版会、2019年2月

- 松方冬子「約条と契約—徳川政権の外交とオランダ東インド会社—」『東洋史研究』78-3, 2019年12月

[学会発表]

- MATSUKATA Fuyuko, “Gifts and Commissions as a Replacement of Border Tax: Reevaluation of the VOC gifts to the Tokugawa Shogun,” the workshop “Gifts and Tribute in Early Modern Diplomacy: Global Perspectives,” Warwick in Venice (Palazzo Pesaro-Papafava), Venice, Italy, 8 December 2018
- MATSUKATA Fuyuko, “Introduction,” the workshop “Correspondence between Crowns: Diplomatic Practices in Siam and its Neighbors in the 17-19 Centuries,” Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand, 19 February 2019

[その他]

- MATSUKATA Fuyuko, “Five Types of *Sakoku*, and Perhaps More: Japan’s Self-Portrait within the Context of ‘General History’,” Chair for History of the Modern World, Institute of History, University of Zürich, Zurich, Switzerland, 10 December 2018
- MATSUKATA Fuyuko, “Five Types of *Sakoku*, and Perhaps More: Japan’s Self-Portrait within the Context of ‘General History’,” University of Naples L’Orientale, Naples, Italy, 13 December, 2018
- MATSUKATA Fuyuko, “Correspondence between Crowns: A World History of Diplomacy,” Princeton University, Princeton, New Jersey, USA, 25 March 2019
- MATSUKATA Fuyuko, “Five Types of *Sakoku*, and Perhaps More: Japan’s Self-Portrait within the Context of ‘General History’,” Wake Forest

University, Winston-Salem, North Carolina, USA, 1 April, 2019

- 松方冬子「『海の道』から『口』へ—長崎を素材に—」鹿島学術振興財団助成事業・シンポジウム『長崎口』の形成—15～19世紀の長崎から見た日本列島の国家形成と対外関係—、長崎歴史文化博物館、2019年6月29日
- MATSUKATA Fuyuko, “Toward a Global History of Diplomacy,” <韓中 外交史 總覽> 編纂과 韓中關係史 研究 팀, 서울대학교 (Seoul University), South Korea, 12 August 2019
- 松方冬子「国書」、連続講座「外交の世界史とオランダ語史料—国書・条約・関税—」ライデン大学東京オフィス、2019年10月16日
- 松方冬子「約条」、連続講座「外交の世界史とオランダ語史料—国書・条約・関税—」ライデン大学東京オフィス、2019年10月17日
- 松方冬子「関税としての贈物」連続講座「外交の世界史とオランダ語史料—国書・条約・関税—」ライデン大学東京オフィス、2019年10月17日